蔵 DE Books
としょだより

ほんとしおり

Vol.7
2017年10月発行

心に羽がはえた人

泥くさくても、みずぼらしくても、ばかにされたってかまわない。そんなことよりね。

日曜の昼下がり。通りを歩いていると、大人とも子供とも、男とも女ともわからない「ひと」は、私にそう語りかけた。

なるほど「ひと」は泥くさく、みすぼらしく、賢くは見えなかった。私はその時考えることがたくさんあって、構っていられなかった。しつれい。

そんなことより、どうしてみんなそんな顔をするんだろう。まるで世界は自分にかかっているみたいに。

私はむっとした。そういう君はここで何をしているんだ。

何もしていないよ。ただ、陽の光をあびたいんだ。

ふと空を見上ると、ぼってりとした暗い雲。ばかばかしい。

通り過ぎようとした時、空が急に泣き出した。ざあ。ざあ。

我先に軒へ逃げ込む人たちで通りは大混乱。そんな中、「ひと」は道の真ん中で、空の涙を満足そうに受けている。いまいましい。

と、さっと雲が流れ、気まぐれな太陽が惜しみない光を「ひと」に投げかけた。「ひと」の体中に滴る水が水晶みたいにキラキラと輝きだした。通りの誰もが息をのんだ。

静寂ののち、町一番の時計台の鐘が鳴り響いた。「ひと」は、音に合わせゆったりとステップを踏んだ。まるでしぜんに。「ひと」の心そのものに。そのしぜんは通りの人の心を打った。

気がつくと、「ひと」は次の場所へと去っていった。

通りはますます眩しくなった。誰もがそこを離れなかった。

蔵 DE Books としょだより

ほんとしおり

Vol.7
2017年
10月号

心に羽がはえた人

3　100冊マラソン！ 途中経過
4　あの本 この本 どんな本？ 『星の王子さま』
6　本棚拝見。第四回 加藤 弥生さん（プロダクトデザイナー）
8　としょがかりの声① 「旅×本」 第四回 東北食い倒れ旅行
10　としょがかりの声② 「『ダイダラ坊の足跡』とその考察」第二回
11　オススメの本『あるかしら書店』 としょがかりの声③「チョコットカフェ部」
12　ご案内 蔵のイベント情報／利用案内／寄贈について

72分の1の、こんにちは。

第58候【虹蔵不見】
11月23日～11月27日

にじかくれてみえず。節気は小雪。日が出る時間が短くなりどんより曇った日が目立つ。一方で俳句の季語で「冬の虹」という言葉もあり、新鮮な響きがある。旬の魚はシャモ。アイヌ語の「スサム」（柳の葉）が語源で、この時期には産卵期でぷっくりとしたお腹の子持ちシシャモが人気。旬の野菜は日本の食に欠かせない大豆。味つけせず煮たものに辛子醤油で絡めた「みそ豆」は朝食のおかずにぴったり。

《参考書籍》「くらしのこよみ」うつくしいくらしかた研究所／平凡社

日本の四季には24の節気と、72の諸侯があります。日々の小さな変化に耳をすますと、季節の足音がそっと聞こえてきます。

～ほんとしおりについて～

2015年秋に矢板武記念館の東蔵にてオープンした蔵DE Booksを、たくさんの人に親しみをもって利用してほしいという思いで作っています。

蔵DE Booksの管理、運営をしているとしょがかりメンバーによる自由気ままな読み物や、本にまつわるあれこれ、そして蔵のイベント情報を楽しく元気にお届けいたします。

本にしおりをはさんだら、一息ついて次は何する？

100冊マラソン 途中経過！

これまで読んだ16冊はこちら！

1冊目『蜜蜂と遠雷』恩田 陸
2冊目『さきちゃんたちの夜』よしもとばなな
3冊目『美しき墓』 川端康成
4冊目『林檎』 林 房雄
5冊目『珍妙な峠』町田 康
6冊目『たったひとつの冴えたやりかた』ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア
7冊目『生成不純文学』木下古栗
8冊目『セメント樽の中の手紙』葉山嘉樹
9冊目『心が高地にある男』ウィリアム・サローヤン
10冊目『ダークゾーン』貴志祐介
11冊目『青きドナウ』浅原六郎
12冊目『りんごの涙』俵万智
13冊目 『螢草』葉室 麟
14冊目 『オラクル・ナイト』ポール・オースター
15冊目『シャーロックホームズの不均衡』似鳥 鶏
16冊目『こころ』 夏目漱石

四月から翌年三月の一年間で、百冊の読破を目指す百冊マラソン。蔵武ホームページにて、掲載中のこの企画。開始から早くも四か月半が経過したが、読破はどれくらい進んだのだろうか？

まず、読破したものに目を向けてみると、昭和の文豪の名作や、海外作家のSFなど、様々な本が集まった。最も記憶に残っているのは、直木賞と本屋大賞の二つを受賞した『蜜蜂と遠雷』である。恩田陸さんの丁寧でみずみずしい文体で描かれる青春群像劇は、圧巻である。

一方、読破の進み具合だが、八月十五日現在で、読破した本はのべ十六冊……そう、十六冊である。目標達成には、残り七か月半で八十四冊読むしかないが、そのためにはひと月で十一冊ないし十二冊読まねばならない。目標達成できるよう、気を引き締めねば。（小町）

あの本この本 どんな本？
『星の王子さま』

文　やよい

1人でじっくりと味わう本も素敵ですが、1冊の本についてみんなで感想を話し合うのも読書の楽しみ方の一つ。ネタバレ満載なので、未読の方はご注意を！

『星の王子さま』
サン＝テグジュペリ　作
操縦士の主人公は砂漠に不時着し、そこで不思議な少年に出会います。その少年は、とある星からやってきた「王子様」なのでした…。

メンバー紹介
やまね：われらが頼れるリーダー
小町：メンバー随一の読書家
やよい：旅好きくいしんぼう
かな：絵心あふれるお姉さん

『星の王子さま』との出会い

やよい：一番最初に『星の王子様』を読んだのは？
かな：半年くらい前。今まで読む機会がなかったけど、矢板武記念館の蔵においてあったのを読んだかな。
やよい：私は小学生の時、『星の王子様』が好きな担任の先生の影響で読んだ気がします。
小町：同じく小学生の時、隣の席の女の子が読んでいるのを見て借りました。
やまね：英語の教科書に載っていた気がする。大学では、フランス語の教科書に載ってた。
小町：小さい頃に読むより、大人になってから読んだ方が心に残りますね。記憶に残る本は、自分の考えや行動を変える本。子供にとっては当たり前のことが書かれているから、あまり印象に残らないのかも。
やまね：子供の頃は、王子様と同じ視点で本を読んでいたけど、大人になってからは主人公の目線で本を読んでた。
小町：操縦士が大人の代表という気がします。
やよい：でも操縦士も、昔子供だった大人なんですよね。

「大人について」

小町：大人は子供と違って、内面でなく着ている服とか仕事とかで人を見るところがある。
やよい：この本では、そんな大人を少し皮肉っているような。
やまね：本に出てくる大人は変わっていると思うけど、実社会でこんな大人がいたら権威とか外側を見て接してしまうかも。本質を見るのは難しい。本には学者も出てくるけど、知識ばかり得て自分では動かない人として描かれてる。こういう人にはなりたくないな…

『星の王子さま』のキャラクター

やまね：一番印象的なのはキツネかな。
小町：ヨーロッパでのキツネは賢いイメージですね。
やまね：イソップ物語とか。
やよい：たまに失敗してるけど
小町：この本の中では、人間よりも真理に近いものとして書かれている。
やまね：人間を皮肉ったり、達観している感じ。ヘビも印象的なキャラクター。
小町：人間が人間を皮肉るんじゃなくて、動物が人間を皮肉っていますね。この本では、いろんな動物や植物が出てきて話す。そこから見た人間を表現している。
やまね：動物が人間を皮肉ると、表現が柔らかくなる気がするね。

お気に入りの場面

小町：キツネのセリフで「大切なことは目に見えない」
やよい：この本で一番有名な一文だと思う。
小町：時間をかけた物には責任を持たなければならないというところ。大人になってから分かった。
やまね：キツネと王子さまが別れる場面が好き。王子様の髪の色をしている小麦を見て、王子さまを思い出してキツネは幸せを感じるだろうっていう。
やよい：主人公と王子さまの別れでもそんな表現があったような。
やまね：夜空の星を見上げては、どれかに王子さまが住んでいると考える。そういう感覚を持っていたら幸せに生きていけそう。

『星の王子さま』ってどんな本？

☆『星の王子さま』ってどんな本？
やまね：人生に大切なことが書いてる本。
小町：捨てずに本棚に取っておきたい本。
やよい：読む度に受け取り方が変わりそうな本。
やまね：人生の節目に読んだり。蔵＊武の活動にも活きてきそう。
活動の後ろに想いがあるから頑張れる。

本棚は、心を映す鏡なり。

本棚拝見。

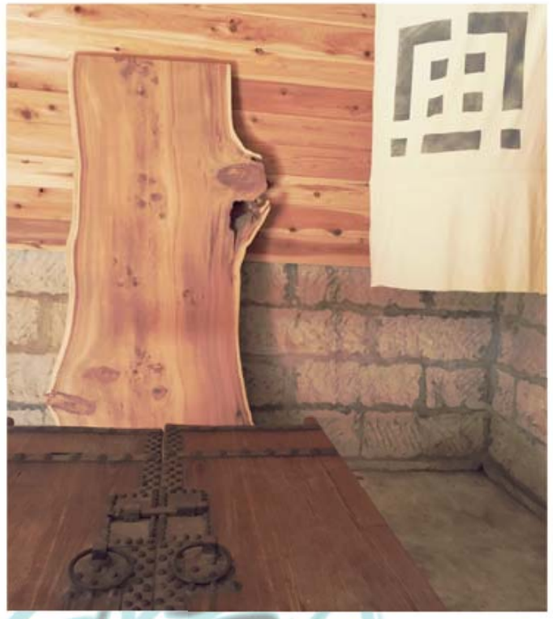
文　やまね

第四回 加藤　弥生さん プロダクトデザイナー

今回拝見したのは、加藤弥生さん。東京でデザインの仕事をされています。山田の長閑な田園風景の中にある家を、別宅として持ち、6年前から週末などに矢板に来ては地道に改装。最近やっと落ち着いたというお家は、母屋は昔の作りを生かし、高い天井と広々した空間。そして、庭には納屋を改装した本が沢山あるスペース！早速拝見です！

（右）奥のスペースは両親の専門書が並ぶ。シャンデリアが素敵。周囲と隔てられた空間。ここなら「本の虫」になれそう。

（中）日当たりのいい手前の本棚。専門書と違い私達にも見慣れた作家の文学作品が。



開放的な土間スペース。テーブルの板は中国から帰った時に船に乗せて連れてきたもの！

矢板とのつながり

加藤さんと矢板の縁は、今から30年ほど前。両親は大学教授という仕事柄、いろんな土地に移ってきましたが、父親の実家の仙台と他の地域の中間にあり、研究室以外に研究に没頭できる家をということでこの家を選ばれたそう。以来ふるさとをもたなかった加藤さんにとって矢板は特別な場所だそう。

加藤さんにふるさととは何かを伺うとこんな風に答えて下さいました。加藤さんにとって幸せ＝好きなものに囲まれていること。ふるさとにはその人のお気に入りの場所や思い出が詰まっている。ふるさとがあるのはとても恵まれたこと。加藤さんの話を聞き私は、この地に生まれたことにもっと誇りをもとうと思えたのでした。

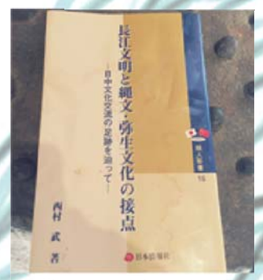
また、デザインの仕事をしている加藤さんの創作の源は、東京より矢板のほうにあるそう。東京はなんでもあるけれど、それは外から与えられたもの。逆に矢板は何もないけれど、自分で何かを作る余白がある。そして矢板では仕事の合間にちょっと庭の草花に触れることが気分転換になるそう。

両親と加藤さんの本棚

本棚スペースの奥は、加藤さんの両親が研究に使う専門書がずらり。子供の頃から両親が研究する姿を見てきた加藤さん。研究分野には興味がなかったけれど、一つのことにこだわる姿を見てきたそう。

そして加藤さん自身も、大学生の時に「一つのこと」を見つけます。それは中国の少数民族。そこは現代にあっても独自の文化を持ち続けているそう。その地域の染色技術や背景にある歴史に興味を持ち、実際に中国に住んだことも。母親が台湾の方なので、その歴史を知ることは自分のルーツを知ることでもあるそうです。

本棚スペースの手前は開けた空間。文学の本が並ぶ中で、加藤さんの美術関係の本や工芸の本も。中国から来た技術が日本に伝わり、また独自の文化を築いていく。それは両親から引き継いだものからまた新しいものを作り出す加藤さんの姿に重なってみえました。



加藤さんが中国の文化に興味を持つきっかけとなった『長江文明と縄文・弥生文化の接点』西村 武 著 / 日本橋報社。

中国の陶器。綺麗なだけでなく、家の雰囲気にうまく馴染んでいる気がする。

これからのこと

2歳になる息子さんがいる加藤さん。母になって何が変わったかを伺いました。昔は仕事をこなしスキルを身につけようと、いろんなことをしてきたが、今は何が大切かを考えて選ぶようになったそう。そこで何を選んだのは、「ありがとう」といってもらえることをすること。ありがとうと言ってもらえることがやはり一番嬉しいことだそう。

そんな加藤さんは、この家を人が集まる場所にしたいとのこと。食や工芸、そしてものづくりなどのイベントを開催したいそう。そして現在、10月に行う染物や食に関するイベントを企画中！

受け継いだものをより良いものにし、それを自分だけのものにせず、周りに広めていく加藤さん。矢板にまた一つ素敵な場所が生まれました。これからが楽しみです。

旅×本

第四回
東北食い倒れ旅行

文　やよい

今回の旅は、題して「東北食い倒れ旅行」。おいしい東北をお届けします。

○一日目

運転がちょっぴり苦手なやよいですが、今回の旅行はレンタカーを借りて出発しました。まずはひたすら高速道路で宮城県を目指します。

車を運転することおよそ3時間。宮城県松島に到着しました。街をふらつき、牡蠣と牛タンをペロリ。その後は、遊覧船に乗り松島の島々を巡りながらカモメを激写！船を下りてから、相方の「海鮮をまだ食べてない！」という熱い希望の下、も一度ペロリ。海の幸をおなかに詰め込んだ後は、今夜の宿の山形県銀山温泉に向かいました。

銀山温泉は山中にある美しい温泉街です。ぜひ写真に撮らねばと張り切っていたのですが、初夏のためなかなか陽が落ちず納得のいく写真が撮れません。山形の幸をふんだんに詰め込んだ夕食をいただいた後に再チャレンジしました。柔らかな灯りに照らされる温泉街は格別でした。就寝中、食べ過ぎによりキリキリと痛み出す胃。負けるながんばれ胃袋！

○二日目

銀山温泉を後にし、宮沢賢治ゆかりの地である岩手県花巻市へ。まずは「宮沢賢治童話村」を訪れました。入口は銀河ステーション。緑あふれる敷地内には、作品にちなんだモチーフが立ち並びます。賢治の教室という木造の建物では、物語に出てくる動植物や星について学べます。

その後、賢治も食べたという岩手名物「わんこそば」に挑戦しました。10杯でかけそば1杯分くらいでしたが、昨日のダメージも残っているのか26杯でリタイア。色々な具もあり（始めの内は）美味しかったです。

岩手県に別れを告げて、山形県にUターン。夜は居酒屋で芋煮などの山形名物をいただきました。

○三日目

旅行最終日の三日目。胃袋の限界に挑戦する最後のイベント「サクランボ狩り」。木が立ち並ぶビニールハウス内で、黙々とサクランボを頬張ります。お腹はいっぱい。でもせっかくの食べ放題なら、元は取らねばとモグモグ。自分の貧乏性が恨めしい。

お腹いっぱいになった後は、この旅最後の目的地「蔵王狐村」に向かいました。園内には放し飼いの狐がいっぱい。一口に狐といっても、丸くて狸のような子もいれば、毛色が白い子もいました。モフモフとの別れを惜しみつつ、帰路につきました。

旅行を楽しむためには、もっと頑丈で大きな胃袋と胃薬が必要であると悟った今回の旅でした。

上段　サクランボ狩り

下段
（左）日が落ちた後の銀山温泉
（中上）かもめと松島
（中下）夕暮れ前の銀山温泉
（右）カキと牛タン

上段
（左）素敵な売店（中）銀河トレイン
（右）童話村入口

下段
（左）蔵王狐村の狐（右上）わんこそば記録
（左下）芋煮＋α

『銀河鉄道の夜』宮沢賢治

するとどこかで、ふしぎな声が、
銀河ステーション、銀河ステーション
と云う声がしたと思うと…

としょがかりの声②

『ダイダラ坊の足跡』とその考察

第二回

文　小町

『ダイダラ坊の足跡』の中で柳田は、“東京よりも東の土地では「ダイダラ坊が山を作った」という話は聞いたことがないが、ダイダラ坊の足跡に関する話は数多く残っているということから、神話が時とともに現実味を失った後、東へ東へと移住していった”と述べている。また、ダイダラボッチの○○と言われる窪地が多いことから巨人の伝承があったことが窺える、としている。

さらに、関東圏において巨人に対する名称が非常に多いことも確かである。たとえば、上総ではダイダッポ、常陸ではダイダラボー、下野ではだいだい坊、でんでん坊といった具合である。この名前の数だけこういった巨人に関する神話が存在している、と考えられる。神話に登場するダイダラ坊は山を背負ってきたり、窪地を作ったり、足を洗ったりすることが非常に多い。

私の出身地である宇都宮市上河内にも、「でんでん坊」の伝説がある。羽黒山という山について書かれているのだが、要約としては、羽黒山はその昔、でんでん坊が遠い土地から背負ってきたものである……という話だ。面白いことに、上河内には芦沼（あしぬま）という地名がある。音からわかるように芦沼は（でんでん坊の）足跡でできた沼である。伝承では、でんでん坊が鬼怒川の水で足を洗った際に、足を置いた場所に水が溜まってできた沼とされている。

次回も、ダイダラボッチの呼称や、それに付随する巨人譚について書いていこうと思う。

おすすめ本

あるかしら書店』

ヨシタケシンスケ　著
ポプラ社

今回のおすすめ本は、ヨシタケシンスケさんの『あるかしら書店』。ヨシタケシンスケさんと言えば、一風変わった内容とほのぼのとしたイラストが魅力的で、いま、最も売れているイラストレーターの一人だ。書店の児童書担当店員のアンケートをもとに選ばれる「MOE絵本屋さん大賞」を３度受賞していることからも、その人気ぶりが伺える。

そんなヨシタケさんが描く最新作が、この『あるかしら書店』だ。舞台は、多種多様な「本に関する本」を取り扱っていることで有名なとある町の本屋。そこへ、老若男女が様々な本を求めてやってくる。「○○○な本はあるかしら？」と。

少しだけ中身を紹介すると、「本の降る村」、「本が四角い理由」、「本との別れ請負人」、「書店婚」……等々、目次を見ただけでも、どんな話が書かれているか想像が膨らんでしまう。

絵本は子どもの読みものというイメージがまだまだ世の中にあるように思えるが、これは、子どもはもちろん、大人が読んでも面白い本だと感じた。是非読んで欲しい。

としょがかりの声③

文　やよい

蔵＊武Projectのカフェ好きメンバーで、コーヒーについて学ぶ「コーヒーセミナー」に行ってきました！

今回お邪魔したのは、宇都宮市にあるカフェ「Takane Man Coffee」さん。素敵な店内で、マスターにいろいろなコーヒーを淹れてもらい飲み比べました。豆の曳き方・ドリッパーの種類・お湯を注ぐ速さなどの変化で、大きく味が変わることにびっくり。飲み比べの後は、私たちも実際にコーヒーを淹れてみました。やっぱり、マスターが淹れてくれたコーヒーの方がおいしい…。

皆で同じものを飲んでも「美味しい」と感じるコーヒーは違っていて、当たり前かもしれませんが、自分の「好み」は自分で探していくしかないなと改めて実感しました。

「Takane Man Coffee」さん、ありがとうございました。

ご案内

小さな蔵の映画祭

日付：11/25(土)

場所：矢板武記念館西蔵

上映作品：「麗しのサブリナ」(113 分)

開場：10:00　上映開始：10:10

蔵＊武 project
の活動の詳細は、
こちらをチェック→

蔵 DE Books 利用案内

入館料１００円。
（蔵で飲み物の提供あり）

・貸出し可。（一人２冊。２週間まで）

※駐車場はありません。
市役所駐車場をご利用ください。

・利用時間（注）片付け時間を含む。

４月～１０月　　９：４５～１５：３０

１１月～３月　１０：１５～１４：３０

休館日は月曜、火曜、祝日の翌日及び、
年末年始（１２月２７日～１月５日）

本の寄贈について

受付日：毎月最終土曜日

受付先：矢板武記念館受付

※スペース等の都合により、
本を本棚に並べられない
こともあります。

※公序良俗に反するもの、
宗教や思想色の強い本を
並べることは出来ません。

まちライブラリーに加入しています。

まちライブラリーとは、まちのあちこちに本棚を置き、本を通して人との縁を繋ぐ活動です。全国で展開しています。

寄贈の際は、メッセージカードに感想などを記入してください。

本に付いたメッセージカードが次々に本を読んだ人たちの想いを伝えていきます。

蔵 DE Books の全ての本にはまちライブラリーのシールを貼付。

蔵＊武 project メンバー募集！！

矢板が好き、古い建物を活かしたい、文化、芸術に興味がある方。
一緒に蔵＊武 project をもりあげませんか。年齢・経験不問です。
お問い合わせは p.kuratake@gmail.com まで。

蔵＊武 project とは
矢板武記念館の蔵を人が集まる場所に再生することを目的に、矢板武塾卒生を中心とした２０～３０代の若者達が活動。
お問い合わせ：p.kuratake@gmail.com までメール